



# 東九州支部報



第6回青少年体験登山大会 (7月22日久住山頂にて)

**三班に分かれて出発**  
 学校が夏休みに入って最初の日曜日の七月二十二日、第六回青少年体験登山大会が久住山(1787m)で開かれた。初めて久住山に登る青少年や一般の参加者は期待に胸膨らませ、大分駅前からバスに乗り込んだ。一般参加者の中で初めて登

報告者 後藤 実

## 濃霧の中での体験登山

第六回青少年体験登山大会が、子供たちの夏休みの始まったばかりの、去る七月二十二日(日)に、今年も九重山系の久住山で行われた。この催しは、近年、若者たちの山離れ現象が目立つ中で、次代を担う子供や若者たちに、山に慣れ親しむ機会を提供し、その中で山のすばらしさや楽しさを体験してもらおうと、二〇〇二年の国際山岳年の記念行事の一環として実施たのが始まりである。それ以来、東九州支部が毎年続けている行事である。参加対象者も、青少年に限らず、一般の初心者などにも呼びかけており、第一回は祖母山系の越敷岳、緩木岳で行ったが、二回目以降は九州の登山のメッカ、九重山系に移して、久住山を中心にして毎年行われている。今年の大会はあいにくの曇り空であったが、小・中学生から大人まで五四名の参加が見られ、盛大に、楽しく実施された。(以下後藤実会員の報告による)



## 第六回青少年体験登山大会

### 《 も く じ 》

第六回青少年体験登山大会	1
矢筈岳 (姫島富士)	3
赤星山 (伊予小富士)	4
月出山岳 (日田富士)	5
先達を語る③「工藤元平氏」	6
白峰三山	7
クラブ紹介⑤「二豊山岳会」	8
七月の山行	10
私の無名山ガイドブック 31	10
お知らせ	11
後記	12

るとい中高年の夫婦は「これま  
ではゴルフばかり。今日は女房と  
参加したが、登れるだろうか」と  
ちよっぴり不安げ。

曇ってはいるものまですの  
天気。大分駅から参加者五十  
一人が乗り込むと午前七時、駅前を  
出発した。車中では加藤英彦会員  
のルート説明や、参加者の自己紹  
介などがあり、談笑しながら楽し  
い旅が続いた。ところが水分峠辺  
りからガスが深くなり、牧の戸峠  
に着いた時はホワイトアウトの状  
態。ここでマイカーで参加した人  
たちと合流した。一般登山者の中  
には「これでは写真も撮れない。  
引き返して由布岳に登ります」と

帰る人もいるほど。  
宮崎から来た中年の女性一人  
組は「楽しみにして来たが、この  
ガスでは怖くて登れない。だから  
といって登らずに帰るのはもった  
いない。後を付いて行くので連れ  
て行ってください」と懇願された。  
加藤会員に相談、県外の人とはい  
え山岳会の趣旨にのっとり「どう  
ぞ」と太っ腹なところを見せると  
喜んで同行した。



(牧ノ戸峠で)



(ストレッチ体操、念入りに...)

の号令でストレッチ体操。

このあと午前九時十五分、飯田  
勝之会員をリーダーとする健脚組  
のA班、加藤会員をリーダーとす  
る元気組のB班、阿南寿範会員を  
リーダーとするのんびり組のC班  
の順に出発した。

C班にはお父さんと参加した田  
所蓮 ちゃんやおばあちゃんと参  
加した男の子(〇〇君)、などが  
みんなに遅れまいと頑張り、登頂  
を果たした喜びに浸っていた。A  
班だけは久住分れから九州本土最  
高峰の中岳(1791m)に登り、  
久住山頂でB、C班と合流した。

### みんなが遅いんだよ

B班にはおじいちゃんに連れら  
れて参加した賀来小学校一年の後  
藤達哉君と、お姉ちゃんで同校四  
年生の綾花ちゃん、お父さんと参  
加した南大分中学三年の野間将悟  
君がおり、低学年から順に並んだ。  
出発を前に123...と点呼を取り、  
加藤リーダーから「ガスが深いの  
で前の人と離れないように」と注  
意があり、十三人が出発した。

達哉君と綾花ちゃんは「みんな  
に遅れると迷惑をかけるから」と  
この日に備え、おじいちゃんに連  
れられて倉木山、南平台、秋岡か  
ら旧道を霊山に、西寒多神社から  
本宮山に登って経験を積んできた。  
そのかいあってか杵掛山展望台ま  
での登りでは、一般参加者が遅れ  
がちになり「ゆっくり登って！」  
と注文が出る中で、何度もリーダ  
ーより前を行き、その都度おじい

ちゃんから「リーダーの前を行っ  
てはダメ」と注意される有様。そ  
の度に「ゆっくり歩いても早くな  
るんだもん!。みんなが遅いんだ  
よ」と不満そう。

展望台で小休止、水分と副食で  
栄養補給した。「天気が良ければ  
阿蘇五岳の絶景が望める所」と  
いう説明に、初めて登る参加者は  
深いガスを恨めしがった。  
小休止のあとこのルートで最も  
危険な杵掛山への岩場の登り、下  
りが続く。達哉君と綾花ちゃんは  
大丈夫だろうかと気をもんだが、  
二人ともリーダーにびったり付き  
何事も無かったかのように涼しい  
顔で下りていき、下りきった所か  
ら振り返って後続の人たちを眺め  
る余裕さえ見せる。心配は全くの  
杞憂だった。

### 足が勝手に走るんだ

展望の無い、深いガスの中を  
黙々と登る一行。そんな中、扇ヶ  
鼻北斜面ではヤマアジサイの紫の  
花が無聊を慰めてくれ、幼い子供  
たちも「こんな所にきれいなアジ  
サイが!」と心打たれた様子。星  
生崎下の岩場では杵掛山の経験が  
生きたのか難なく通り、避難小屋  
でトイレ休憩。空池まで登った所  
で遅れた人待ち、一気に山頂へ。  
山頂着は十一時三十分。三度の  
休憩を入れて二時間十五分の登り  
だった。常にリーダーの一メート  
ル後を歩き通した達哉君に、加藤  
会員から「達哉君はすごいね」と  
褒められると、満面に笑みを浮か

べて喜びを表した。この褒められ  
たことが彼にとっては大きな財産  
となるであろう。ガスが深く、視  
界はゼロ。  
ガスが深いためか一般の登山者  
は少なく、体験登山組でも中岳に  
登ってくるA班はまだ着いてなく  
B班がトップ。A班やC班が着く  
まで輪になって弁当を開いた。や  
がてA班が到着、それに遅れるこ  
と三十分でC班が到着した。  
全員が到着して弁当を開くと、  
あちこちで缶ビールが開けられ、  
カンパリーの声が久住の山頂に弾  
んだ。久しぶりに顔を合わせた仲  
間同士で楽しい談笑の時間が過ぎ  
ていく。

ゆっくり弁当を食べた後、山頂  
標識を入れて全員で記念撮影。加  
藤会員の音頭で「青少年体験登山  
-バンザイ-」の三唱が深いガスに  
飲み込まれていった。  
午後零時四十五分、山頂をあと  
に下山にかかった。山頂直下の急  
坂で、走って下りる達哉君に「走  
ってはダメ」と注意するおじい  
ちゃんに「だって、足が勝手に走る  
んだもん!」と口を尖らせた。  
往路はきわめて順調で、午後三  
時一〇分には牧の戸峠に下山した。  
全員が下山するのを待って閉会式  
が行われ、甲斐一郎会員から閉会  
の言葉があり、バス組、マイカー  
組はそれぞれ、次は好天のときに  
登ろうと、次回の登山に夢を膨  
らませながら家路についた。

と注文が出る中で、何度もリーダ  
ーより前を行き、その都度おじい



矢筈岳から眺める国東の山々



(元気の良いA班は中岳山頂で)

月例山行報告

矢筈岳(姫島富士)

(八月月例山行)

中野 稔

八月の富士山は『姫島富士』矢筈岳(266.6m)だ。定刻の午前五時にサニースポーツを出発、国道十号から国道二一三号線にて伊美港に七時前に着く。伊美港は伊美川の河口に在り伊美山(271.8m)辺りが源流の一つかも知れない。一日に往復二十四便のフェリーが有り、一行十二名は一台の移動用車とともに船に乗り込む。

五月の姫島かれい祭り、八月の盆踊り(きつね踊り)、十月の姫島車えび祭りと三大行事が有り、人口二千四百余りの島は大勢の観光客で賑わう。平成の大合併で大分県の市町村は、十四の市と三町一村になり、姫島村が唯一の村として頑張っている。逞しいと感じるのは私だけだろうか？

十日ぐらい前、何の因果かきつね踊の見物と小父さんの叔母に当たる方の墓参りに訪れた。二十歳前後の彼女は赤ちゃんを産んで間もなく他界し、その亡骸がこの地にひっそりと眠っているとの事、其れらしき墓を探したが終戦当時

の出来事であり墓石に墓碑銘が無い墓が多い為、特定ができずに墓地对して冥福を祈る事になった。盆踊りの帰りの便では船底の、いつも車を載せる所(車両甲板)にゴザが敷かれており、そこに大勢の観光客が座っていた光景は、小父さんに言わせれば、「難民船かボートビープルだね」。楽しいような哀しいような不思議な時間でした。

八時前に姫島港に着いた一行は、まず西の達磨山標高百五メートルを目指した。港から山頂まで全て歩く者、車で中腹まで上るものなど様々。中腹の車道から山頂の社殿までは十分も掛からずに到着。



(達磨山山頂にて)

山頂から九名は来た道をそのまま引き返したが、三名は少し北にある三角点のある場所へ。軽い藪

漕ぎを強いられて着いた地点で、GPSを頼りに三人で限なく探しだが、草が生い茂っていたために三角点は見つけられなかった。鎌で草を刈れば多分見つけられたと思う。三名は竹や草に覆われた山道を強引に下り車道に出る。

三々五々と移動車に分乗し、今日の本命の矢筈岳を目指す。登山口から延びる山道は細く深くえぐれて、島の名山の歴史を物語っている。途中で古い車道を横断する。登山客が少ないことを物語るように、藪や草木が行く手を遮るもの我々を歓迎してくれた。十時前に登りだして十時四十分には山頂とご対面。

十数年前に来た時は、山頂公園のように整備され、展望台もシャキツとして社殿の様な小屋の中にマムシが眠っていたのを記憶している。初めて来た人にとっては、草ぼうぼうの荒れた公園の様な山頂が原風景になってゆく訳で、何度も来た人にとってはスライドの一コマとなり未来を連想するときの参考になる。

山頂でかれこれ一時間余り昼食と歓談をし、山頂のひび割れたコンクリ製の展望台で写真撮影をした。

一等三角点の横には、高さ一メートルで六角形のコンクリ製の柱が何も言わずに立っている。元越山、八郎岳の山頂でも見かけた記憶が有る。

十二時頃下山した一行は、東の灯台を目指す。展望と三角点を期



(矢筈岳登山口にて)

待したが、三角点は藪に覆われて接近困難との事。観光地の様な灯台だが、人気はなく数名の観光客に出会っただけである。

灯台からの眺めは、国東半島の山々が悠然と林立し、何かを主張しているかのように思えた。東から大嶽山、小門山、牛岳、両子山、千燈岳、黒木山、鷺巣岳、ハジカミ山、尻付山、猪群山などが行儀よく並んでいた。

尤も矢筈岳山頂からの方が展望はいい。一度登った山を遠くから見ると不思議な愛着に包まれる。まるで生まれ変わって来て見る風景のように。過去の思い出は、より正確に理解するか、美化して桃源郷のようにするかは個人の自由だと思ふ。

三十分ぐらい灯台の影で雑談に

花を咲かせ興じたお陰で、十四時十分の便が出るのを、姫島港の待合室でアイスクリームを食べながら見送ることになった。十五時二十分の便で伊美港に戻り、流れ解散となり、四台の車はそれぞれの方向に走り去った。

参加者：飯田、石川、今山、岐部、久保、下川夫妻、得丸、西、中野、牧野、宮本

## 赤星山(伊予小富士)と豊受山と二ツ岳

(九月月例山行)

中野 稔

九月二一日二時三十分大分を出発、別府港に二時三十分着。二時五十分八幡浜行フェリーに乗船。仮眠をとることなく来たので、乗船して直ぐに毛布を一枚百円で借り受け横になる。熟睡は出来ないが、石鎚SAにて缶コーヒをゲットして、睡魔に打ち勝つぐらい、約二時間眠れた。フェリーでは不思議な一行に出

会った。見るからに二〇前半の七、八名の女性陣と、四、五〇代の十名ぐらいの男性陣のグループである。手荷物は車と見たが女性陣の何人かは携帯でメールを打っているようだった。観光客は二、三〇年前に比べれば半分か三分の一位だと説明してくれた。

二時半過ぎに八幡浜港に着き、そのまま市街地走りながら大洲南ICを目指しカーナビをセットした。科学技術が進歩すれば、全自動運転も可能に成るのかも知れない。五〇年前は今日の車社会を予測できなかったように、これから五〇年先の社会は予測し難いほどに変わっている事だろう。

石鎚SAで豊坂山登山口辺りにセットして、ナビの案内に耳を傾けながらハンドルを回した。東九州支部の三銃士は、五〇、六〇、七〇代の中盤でそれぞれの登山人生の思い出の中で、夢の中の山を登っているような感じがした。デジャブーと言うかフラッシュバックとも言うべき記憶を語りだす訳で、理解出来ないシーンが多いと感じた。

松山自動車道三島川之江ICを下りて西に向かい、国道三一九号を南へ。法皇トンネルを過ぎて金沙湖に下る手前に、『標高八九二メートルの翠波峰展望台』の標識を見つけてしまった。ガイドブックには車道が山頂まで伸びているとの事、実際に確かめることになった。ちょうど日の出の二、三十分前に到着したので、海岸にほぼ平行に伸びている。



(朝日に染まる二ツ岳、赤星山、豊受山・翠波峰より)

山頂公園で太陽を今か今かと待つ。光が山々を照らし出すにつれ霧や木々は輝きを増してゆき、赤く染まる峰々に神々しさを感ずる。

この三角点は、東西に二つあるこの鞍部にあつたのだが、事前に調べていなかったのを見つからなかった。

東の方角には剣山が見えているはずというが肉眼では識別が難しい。西の方にはこれから登る事になる山々が明るく照らされている。法皇山脈は石鎚山脈から笹ヶ峰の東部から東北部に出た支脈で、海岸にほぼ平行に伸びている。西

赤石山、ハネズル山、赤星山、翠波峰などが並び低くなってゆく。六時過ぎに赤星山の登山口へ向かう。中尾の集落から延びる林道にて登山口の標識を見つけひと安心。七時ちよい前に着いて草に覆われた林道を歩く。尾根辺りに皇太子御成婚記念植林の標柱を発見して間もなく登山道に入る。十分位で中尾からの登山道と合流。比較的緩やかな傾斜の登山道であるが、下るときに感じた急傾斜感は何だったのだろうか、不思議である。

山頂近くにあつた赤い星の祠は金星と連想したが、可愛いと感じた。赤星山(1453.2m)は「伊予富士」と讃えられ、北ルートは機滝、稲妻滝、千丈滝などがあり秀逸であると紹介されている。



(赤星山にて)

九時には山頂に着き、広く平らかな山頂は、カヤが刈り払われて、



(赤い星の祠)

展望も良い。伊予三島の市街地が見え、二つ岳の荒々しい姿が印象的だ。地元の小学校の努力遠足かは定かでないが、毎年登っているような木製の表札があつた。

重廣恒夫さん達の写真がネットに載っていた。中央分水嶺にこの赤星山が該当するのである。四国の中央分水嶺を歩くと聞いているので、間違いないと思う？

西南の尾根の標高千二百メートル辺りにカタクリの群生が有るとの事。これから登る事になる豊受山から赤星山そして二つ岳は縦走が可能であるが、挑戦者は少ないと紹介されている。

十時半前に駐車場に下り着き、豊受山の駐車場を探す。県道六号から県道一二六号に入り豊坂の集落で民家の住人から登山口を訪ねたが、最初の民家では現役だと思われる四WDや乗用車など四五台と沢山の犬達が出迎えてくれたものの、言葉の通じる人間は見当たらず断念。多分数か月前までは何人かが生活していたと感じた。次の民家では、元気そうなお年寄りが夫婦で庭の手入れをしてい

た。艶のある顔から発せられる言葉は、逆に元気を貰ったような気分になり楽しい気分にはさせられた。教えられたとおりに林道に出て登山口の標識を何とか見る。ここで昼食を取り十二時半に登山開始。植林の中を尾根を目指して登り、次に東西に延びる主尾根の山腹を高度を少しづつ稼ぎながら高度差三百メートル位登ると北ルートとの豊坂分岐に合流する。

主尾根を高度差百メートルほど登ると五穀の神・豊受神社が静かに待っていた。道なき道をこれだけの資材をどうやって運んで来たのだろうかと思心した。当たり前前に見える風景や景色等も、沢山の人の労力や執念などが背後に隠されている訳で、その全てを知ることが出来ないと感じる。神社の背後の尾根を右に行けば山頂であり、左に行けば三度ヶ崖展望所に出るのが今回は見過



(豊受山三角点にて)

ごしてしまった。三角点山頂は稜線上の木立の中で、最高地点はその手前的小ピークだ。二時過ぎに山頂に到着して、四時前に登山口に下り着いた。そして、今夜の宿泊場所を探しながら県道六号線を西へ向かう。ゆらぎの森へ通じる途中の部落に有るゲートポール場の休憩所を許可を得て、野営場所に使用してもらった。明日は谷を挟んでゲートポール場の真向かいに、荒々しい岩峰を連ねて見える二ツ岳に上る予定だ。八幡浜から松山道と雨に遭ったがそれ以外晴天で、結果的に快適な登山を楽しめた。朝は四時頃から朝食を準備、五時には二ツ岳登山口へ出発、五時四十五分鉄の階段のある立派な登山道を歩きはじめる。赤いミズヒキやタゲなどの花が登山道の脇にひっそりと咲いている。我蔵峠までは三五〇メートルの高度差を、約二時間かけて少しづつ山腹を巻きながら散歩の様な感じで登っていく。この道はその昔の薪運搬道で、今も立派に残っている。

我蔵峠からは一転して、尾根の登り応えのある急坂とアップダウンの連続で、山頂が目前に見えながらなかなか近づかずに、登山したと思える感じがした。山頂には十時十分過ぎに到着、三十分位休憩して下山。山頂の南の崖からは赤石、石鎚連山が見える筈だったが、霧のためエビラ山とその向こうに続く岩峰の雄姿だけが見えていた。一時四十五分に下山した時に、広くない駐車場に岡山県ナンバーの車が止まっていた。途中誰とも出会わなかったから不思議な感じがした。もしかしたら、今回の登山予定だったハネズル山の方に登っているかも知れない。



(二ツ岳山頂にて)

## 月出山岳(昌臺)

### と牧ノ平

(一〇月月例山行)

久保洋一

人は何を求めて山に登るのだろうか？

現代社会のようなストレス社会では多くの人が心と体のバランスを保てなくなりつつある。そのプレッシャーからか、体を動かし汗を流す事の必要性を無意識に感じ取っているのだろう。そもそもストレスは人間関係に起因することが大半であるが、人工的なものに囲まれて過ごしていることも少なからず関係している。人は人工的なものの危うさを無意識の内に感じ取っているのだ。人工林の中よりも自然林の中の方が安らぎを感じるのには私だけではないだろう。大自然に身をおき悠々の時のゆりかごで安らぎを覚えるのだ。

さて、一〇月の月例山行の報告にはいろいろ。今月の富士は『日田富士』月出山岳だ。

一〇月七日、朝五時〇〇分サニ一発。別府に向かい飯田さん、次いで遠江さんと合流し、別府インターで高速に入る。珍珠インターで高速をおり、それ

れからは一般道で登山口を目指す。二一〇号線を通り、北山田駅の先を右に曲がり朝見牧場方向に向かうが途中、道を失う。少し遠回りになるが牧場側からではなく、月出山小学校の方から朝見牧場へ抜ける山間の道を車で登っていく。かなりの高台で明るくなった所に月出山集落があり、進行方向に向かつて右手に公民館、その横に広い舗装した駐車場がある。

登山口は駐車場側から道路を隔てて反対側にある。広場の脇のコモスの花が美しい。登山口と言ってもコンクリート舗装をしていて、自動車一台が十分通れるくらい広い道である。まっ、車でも行けるでしょうが、二台の車はその駐車場に置いて登り始める。

七時一〇分、少し登ると民家のはずれに栗の木があり、栗が道路やその脇にたくさん落ちていた。みんなでも栗を拾って再び登山続行。自然の恵みに感謝！まだ、コンクリート舗装は続く。それから五分も登っただろうか。みんなの意見を入れて、中野さんが駐車場に車を取りに戻る。

私たちはそのまま登り続ける。しばらくすると、中野さんが車で追いついてきた。誰とは言わないが、一人が車に乗り込み、先に上がってしまった。羨ましい。私たちは、そのまま歩いて登り続ける。途中、まだ何ヶ所か栗の木があり、栗拾いを楽しむ。また、アケビも道路沿いの木にあり、自然の味覚を味わうコトが出来た。

やがて、コンクリート舗装が終わり、その先の二股路に車は止めてあり、二人が我々を迎えた。

先着の二人と合流し、右の道を入っていった。この道も草ぼうぼうではあるが林道らしく、車が通れるくらいの幅がある。そしてこの道がずっと山頂まで続いているのだ。登りはじめて約一時間、八時一〇分、月出山岳山頂到着。

山頂には鉄で組んだ高い展望台があり、その上に上がると、三六〇度の展望である。北には八面山、南には万年山、遠くには英彦山や津江の山々などを見ることができた。しかし、天気あまりよくなく、遠くの山はあまりはっきりとはしなかった。

七〇八、七mの三角点のあるところは、展望台のあるところから少し手前であった。山頂で記念写



(月出山岳三角点にて)

真

を撮り、少し戻って三角点のある場所へ移動。山頂は東西に長く広い台地状で、三角点のところも殆ど展望台のところと高低差がないようである。そこで記念撮影をしながら、八時三〇分には下山開始。

下る途中で少し雨が降ってきた。途中までは、歩いて降りたが、ご苦労なことに中野さんが、車でピストンをしてくれ、みなあまりぬれずに早々と降りることができた。九時〇〇分駐車場到着である。その頃はもう、雨はやんでいた。

時間があまりに早いので、もう一つ山に登ることになった。行き先は玖珠盆地の西にある高台、牧ノ平(天道山)となった。登る時に来た道を進んで、朝見牧場へ抜けようとしたが、すぐ先が工事中で断念。元の道を引き返す。

山間部の田舎道、途中一度は迷ったり、遠回りしたりで、一旦二一〇号線に出て、牧野原牧場への道に入る。しばらく車で登ると、急に牧場が開けて、その先のゲートは閉じられている。

牧場の建物(現在は使われていないようである)の傍に車を置き、牧場のゲートを越えて登山開始、一〇時二〇分。

目指すは牧場の先に見える山である。ところが、ここも車道(アスファルト舗装)が牧場の中を山頂のほうまで続いている。その車道の両側は牧場だから(閉鎖しているのか牛は見当たらない)一面のスキ野原である。気持ちのいい風にスキが揺れ、

秋をたっぷり感じる事ができる。先程降った雨も上がり、空も少し明るくなってきた。みんな、談笑しながら登っていく。牧場を抜けると少し勾配も急になり、木立の間を進むようになる。といつても、明るい広い道だ。大きくジグザグした道を二、三回ほど折り返して進むと台地状の山頂に着いた。

ここも牧場の一部のように、木立は無く、広々とした一面の草原である。少し進むと、スキの中

に真新しい二等三角点があった。牧ノ平(天道山)六二一・一m 一時一〇〇分登頂。



(牧ノ平山頂にて)

三角点の確認が出来たので、その近くでシートを広げ、みんなでお昼食。食後、周りに見える山を飯田さんに山座同定してもらうなど、楽しい時間を過ごす。西北西の方向に先程登った月出山岳がピラミ

飯田さんが先程、カヤや草を刈ってくれた三角点の周りに全員集合し、山頂の記念撮影。

一二時〇〇分下山開始。下山途中、ここにも栗の木、アケビ、グミなどがあり、自然の恵みに再び感謝しながらの下山となる。そう、吾木香もあったね。一二時三三分牧場入り口ゲート前到着。現地で解散。以上二〇月の山行報告である。

参加者：飯田、石川、岐部、久保、下川、遠江、中野、牧野

## シリウス 支部の先達 と語る③

第三回の今回は、近代の久住山と久住高原の祖ともいわれている、工藤元平氏(会員番号一〇四八)(一八八九年〜一九六三年)について。氏のことについて「九州の岳人たち(その登山史)」(二〇〇二年五月・日本山岳会編



↑工藤元平氏

工藤元平氏について、九重の植物観察を通じて旧知の、自然観察指導員協議会の生野喜和人(由布市庄内町)さんにその思い出などについて書いた。

# 「久住の父」

## 工藤元平氏の 思い出

生野喜和人

私の手元に二冊の「久住山誌」がある。一冊はザラ紙印刷

(昭和二三年版)で、もう一冊はカラー表紙(昭和四〇年版)で、いずれも工藤元平氏の著書である。前者は大分市内の古本屋で買い求めたもので、後者は著者から直接頂いたものである。

学生時代(昭和二七)に久住の山、特に黒岳の植生研究にとりつかれた私にとって、渡りに舟の教書であった。昭和三八年からはじまった、大分大学の「くじゅう総合学術調査」に参加し、久住に足を運ぶようになって、同氏にお会いしたのが最初である。

温厚な人柄の方で、若い私たちに久住の自然にとり組む、導きをしてくれた方である。おまけに、同書の頁には、期待される若い学徒として紹介までしてくれている。このことは私にとって、以来久住(特に黒岳)と離れられないきっかけにもなっている。

初対面では、自宅の裏の「久泉館」に案内され、久住に関する新聞記事の切り抜きや、植物調査にかかわった学者との情報など、ていねいに教示していただいた記憶

がある。

氏の過去の経歴は、最近(平成一八、一)に入手した竹田市報「まるごと博物館④」の記事で詳しく分かったが、本人の口からは直接聞いていない業績の多さに恐縮している。

以下、氏と久住とのかわりを、市報から引用して、その偉大さをしのぶこととしたい。

明治二十二年に生まれた氏は、三十二年間郵便局事業に貢献、昭和二十七年に久住町長に就任。町、県等に関わる一〇指に余る各種の委員、役員等をつとめ、幅広く、多岐にわたって活躍された。

工藤元平氏の名を高名にしたのは、氏が生涯をかけて久住にそそいだ情熱である。氏は久住山をこよなく愛し、久住山に登った。その回数は一、〇〇〇回を超えている。その間、未踏の黒岳踏登頂に成功(大正四)し、牧野富太郎博士を迎えての久住山植物採集(大正十一)、久住山の各山登山に成功(大正十五)、久住山原生林帯を踏破して新登山道開拓(昭和二)等々、

大正時代から久住山の国立公園指定に向けて積極的な運動を進め、昭和九年、久住山群並びに高原が阿蘇国立公園に含まれるに至った成果も挙げられた。その他、昭和二年高松宮殿下を迎えての案内役をつとめたのを始め、久住を訪れた歌人と謝野鉄幹・晶子夫妻、北原白秋などの文人墨客を案内するなど、久住山の開発や、紹介、

さらに登山の奨励、植物研究等に心血を注いだ。これらの功績により、西日本文化賞を受賞し、国立公園協会等から感謝状を贈られて、昭和四十四年には勲四等旭日賞を受賞するなど、数々の荣誉に輝いている。

私たちがこのつき合いでは久住の植物のことや、多くの学者を案内しての研究活動の普及以外のことは口にされなかつた。そこに氏の謙虚さを感じ、今更ながら頭の下がる思いがする。

氏は昭和四十三年に、七十九歳でなくなられたが、久住を愛し、久住に生涯を捧げた氏のことを、久住の人々は「久住の父」と呼んでいる。久住にかける氏の思いと情熱を受け継ぐ岳人や、研究者の一人として、自然豊かな久住を後世に受け継ぎたいものである。

温厚な人柄、鋭いまなざしの中に慈愛に充ちた氏の面影をしのびながら、久住の山を見上げています。

(別府大学非常勤講師



師。自然観察指導員協議会。由布市庄内町畑田154)

# 白峰三山

## 北岳・間ノ岳・農鳥岳縦走

小野昭三郎・順子

平成一九年七月二七日(金)と二九日(日)にかけて白峰三山(北岳・間の岳・農鳥岳)を縦走することが出来た。実のところ、この夏は南アルプスの荒川三山、赤石岳に挑戦することにしていた。そのために綿密な計画を立て、準備周到で出発した。

静岡駅で畑薙・樺島ルートは台風四号の影響で通行止になっていたことを知る。さて困ったこととなったが、列車の中で北岳に登る山するご婦人と親しく会話できたことがあって、急遽北岳に挑戦することにした。

駅の案内所で、北岳方面への行程を調べ、広河原が北岳の登山口であるところを確認する。広河原には甲府駅を一四時に出発する便が最後のことで静岡から身延線で甲府に向かう。ここも梅雨明けしたのでらう甲府は暑い。着替えて運動靴を駅のロッカーに預けバスで広河原に向かう。

一六時過ぎに広河原に到着。つり橋を渡り右手に広河原山荘がある。宿泊者は六〇人くらいである。付近を散策するうちに明日に向けての闘士が湧く。二七日は北岳肩

ノ小屋までとし、二八日は北岳・雪溪上をすることになる。バットレ泊、二九日に北岳山荘から広河原へ下るコースを計画した。

五時二四分に広河原を出発。我々より早く出発するグループが多い。大樺沢沿いに高度を上げてゆく。登山者は少なく樹林の中を進む。針葉樹林帯を抜けると樹木は低木となり、谷が開けてくる。槍沢と同じような景観となる。



快晴、雪溪も見えてくる。決して急いでいないが、次々に先に出立した登山者に追いつく。下から見上げると色とりどりのザックが左右に揺れながら北岳を目指している。案外と多くの登山者がいるものと驚いたりもした。

兵庫から来た六名グループと口を交わしながら前になり後ろになりながら高度を上げて行く。雪溪の上を進むが、距離は短い。大樺沢二俣に到着する。左俣を進めば

雪溪上をすることになる。バットレ泊からの落石もあるそうだが我々は右俣に足を向ける。ここから急登となり、槍沢のグリーンバンドと似ている。北岳が次第に迫ってくる。お花畑が顔を見せ始める。お花畑は二・五〇〇m以上の高所にみられる。好天と疲れのため少しずつ息苦しくなる。何度も休みながら三時間余りで小太郎尾根に到着する。

尾根に上がると西風が強くなり寒い。気候が急変した様相である。尾根をアツブダウンしながらやつの思いで北岳肩ノ小屋に到着する。次々に登山者が肩ノ小屋に集まるように到着する。

ヘリコプターが北岳の周辺を巡回する。何でも一人行方不明になったこと。不明者の名を呼びながらの飛行を真のあたり

## 会員所属の山のクラブの紹介コーナー (No.5)

### 「二豊山岳会」

三浦敬志(8180)

#### 二豊山岳会のあゆみについて

大正3年(1914年)に別府の堀、長井、上野、伊谷、波多野、利光、春山、入江、得丸の山岳愛好家が發起して、草鞋(和楽路)会を結成して、堀籐吉郎氏が初代会長として活動した。その足跡は由布、鶴見周辺の山々から久住、祖母、阿蘇の山々におよんでいた。降って大正9年(1920年)になって、気の利いた会の名前にとの意見で、大分県の国名である豊前、豊後の二豊と由布、鶴見の二峰をもじって「二豊山岳会」という名に改称して、引き続き堀氏が会長をやり、次第に行動も多岐多様となり、行動範囲も国内、国外におよんでいった。

なお、昭和30年には細田知事を名誉会長に、野口秋人院長(野口病院長・前東九州支部長)を顧問に推薦して盛大な35周年記念行事を行ったと記されている。

昭和35年(1960年)9月、大分県山岳連盟会報誌に『大分県の山の人』松岡実氏寄稿文に、大正4年工藤元平氏らが直入郡久住町に創った『九州山岳会』が大分県いな九州における山岳会の草分けである。ついで、昭和3年に別府の『二豊山岳会』、昭和6年『大分山岳会』、昭和7年『中津山岳会』、『朽網山岳会』、昭和8年『大分中学山の友』、昭和9年『別府山の会』、昭和10年『銀嶺スキークラブ』、昭和11年『竹田山の会』が創立されたと書かれている。

余談になりましたが、二豊山岳会もその後会員が減少した時期もありましたが、現会長岡村孝治氏の情熱で若い人たちの育成に力を注ぎ、会の活動も以前の活発さを取り戻し、会員も増えました。70周年創立記念行事では、できるだけ多くの会員が参加し、海外での思い出、中華民国親善登山隊を計画し、16名全員が玉山(3997m)に登頂、80周年創立記念行事は5月に富士登山に12名全員が登頂、また地元の山、故郷の山を愛し大切に、登山道の整備、また鶴見山においては『鶴見山ガイドブック』の発行や昭和60年から平成14年まで16年間続けて、ミヤマキリシマ鑑賞登山を行い鶴見山の良さを知ってもらいました。

これからも、90周年・100周年をめざし新入会員募集に力を注ぎ、若い人たちが地元の山から国内・海外の山へと目を向け、伝統ある二豊山岳会を次の世代へと引き継いでいきたい。

(1980年発行の「創立60周年記念誌」に、元会長長本善重氏が寄稿したものを転記。)

例 会…毎月第一、第三水曜日

場 所…別府市中央公民館

月例山行…身近な大分の山はもとより、県外四季を問わず山行を行っています(毎月一回)

※ 興味をもたれる方は気軽に別府中央公民館にお立ち寄り下さい。



にすると遭難かといひ気持ちはし  
ない。幸いにも不明者は別コース  
を下ったこのこと。

肩ノ小屋より北岳山荘の方がき  
れいと聞き、北岳山荘に向かうこ  
とにした。兵庫のグループはばら  
ばらになりながら小屋で待ち合わ  
せを繰り返しの歩行である。彼ら  
は本日農鳥（農鳥岳の名を初めて  
知る）小屋まで行くそうである。  
重い腰を上げ、北岳山頂を目指す。  
ガスが出てきて、視界が悪くなり、  
気温も低くなる。記念写真を撮り  
すぐに北岳山荘に向かう。

柏市の小田さん親子と隣り合わ  
せとなる。二人は明日、間ノ岳・  
農鳥岳を経由して大沢門小屋まで  
行くとのこと。我々も広河原に下  
ることから大沢門小屋経由で奈良  
田に降りることに変更した。奈良  
田から甲府までの交通手段もある  
だろうと楽観視した。

二九日五時一六分に北岳山荘を  
出発する。若いお医者さんの卵に  
お礼を言ってお、間ノ岳に足を向  
ける。雲は多く、見通しはあんまり  
よくない。小田さん親子は朝食が  
遅れたために同行できず、後から  
我々を追いかけけることを余儀なく  
された。

間ノ岳は大きい。中峰岳を過ぎ  
間ノ岳山頂まではアップダウンの  
連続でかなりの登山者と出会うこ  
ととなった。彼らは軽装である。  
朝早く北岳山荘出発し、間ノ岳に  
登頂しました。北岳山荘方面に引き  
返しているのだ。我々が初め考え  
たコースである。北岳山荘で会話  
した人にもお会いすることが出来

た。途中二〇名ばかりのグルー  
プを追い越した。  
間ノ岳からの下りは悪道のガラ  
場となる。登山者がめっきり少な  
くなり、人影が全く見えないとき  
もあった。農鳥岳・間ノ岳・北岳  
を結ぶ逆コースは人気がないのか  
もしれない。しかし、赤みがかつ  
た岩だらけ、奇岩続きの尾根、左  
右にお花畑が続く。  
大分の山で見られるコケモモや  
イワカガミにも出会う。足を止め  
写真を撮ったり、休憩したり、大  
自然を満喫しながら農鳥岳に向か  
う。正に大自然の歩行でとても心  
地よく、疲れも忘れそうである。  
右手には塩見岳に連なる稜線が  
延び、広大なカールが下方に延び  
ている。途中、農鳥小屋の主人か  
ら、雷雨が来そうだから先を急い



だ方がいと忠告された。相当疲  
れていたが休まず農鳥小屋を後に  
した。  
農鳥岳山頂で若者に会う。広々  
した大門沢下降点に着く。この付  
近で遭難死した青年を弔う鐘があ  
ったので、哀悼の意を表した。

ここからは三時間ばかりの急降  
下となる。慎重に一步一步足を運  
びながら悪道を下る。やがて、樹  
林帯に入るもの下りが永遠と続  
く。間ノ岳で追い越したグルー  
プが追いついた。彼らと共に下山す  
ることにした。余りにペースが落  
ちていたようである。何度か沢を  
渡り、暗い針葉樹林帯を下るうち  
に赤い大門沢小屋の屋根を目にす  
ることができた。長い長い下りで  
あった。

先に到着した人々はビールやぶ  
どう酒で楽しく酒盛り最中であっ  
た。しばらくして小田さん親子が  
到着した。小屋まで雨にあわな  
か  
ったが、夜は雨になった。  
三〇日は曇天で今にも雨になり  
そうな天候である。大部分の登山  
者は、既に出発していた。小屋の  
主人がホームページに載せると言  
ってわれわれ四人の記念写真を撮  
ってくれた。

奈良田発のバスに間に合うよう  
六時に出発。高度を下げていくと、  
針葉樹から次第に広葉樹林帯にな  
る。今にも雨になりそうですすま  
ず暗くなる。雷が聞こえ始め、し  
ばらくすると雨になった。次第に  
下り坂は緩やかにしたが、沢に  
架かる不安定な梯子を何度か渡る。  
梯子は雨で濡れていることもあ  
って、われわれは難儀しての渡河  
になった。特に小田さんの息子は、  
体重もあり細心の注意を払いなが  
らゆっくり慎重に沢に渡された梯  
子や吊橋を渡っていた。その姿が  
印象に残っている。

吊橋も何度か渡りようやく奈良  
田登山口に到着した。そこは河川  
工事が行われていて、作業車が行  
き来していた。ここから奈良田バ  
ス停まで四〇分ばかり歩かねばな  
らない。ここで、白峰三山縦走は  
完了した。工事関係者が道路閉鎖  
の柵を始めたので、慌てて奈良  
田に向け出発しようとした。

「奈良田まで送りますよ。」  
と工事関係者から声をかけられた  
ので、それに甘えることにした。  
内心乗せてくれないものかと思っ  
ていた。雨が降り続くので、本日  
の工事は終了とのことである。



今回の登山について

よかった点

- ・荒川岳・赤石岳から北岳登山へ早急に変更したこと
- ・白峰三山を縦走できたこと
- ・高度の五時間以上に及ぶ縦走の厳しさ素晴らしさを体験する。
- ・新たな友人ができたこと

問題点

- ・行程について
- ・ルート確認を怠ったこと
- ・装備について
- ・靴のかかとが途中で剥げたこと
- ・スポーツ飲料水を十分準備すること

七月の山行

石川洋祐

七月一日(日)晴  
福岡空港発仙台行きにて一九時到着。前もって送っておいた荷物をレンタカーに積み込んで青森へ向けて出発。  
二日(月)晴  
岩木山(1624.7m) 岩木山神社から  
三日(火)雨  
八甲田山(1584.8m) 酔ヶ湯温泉から  
八幡平(1613.3m) 見返り峠から

四日(水)曇	岩手山(2038.2m) 駒返しから	一六日(月) (柏崎地震発生)	越後駒ヶ岳(二日目) 駒ノ小屋泊まり	二九日(日) 晴	草津白根山(2164.8m) 白根ロープウェイから
五日(木)雨	早池峰山(1917m) 小田越から	一七日(火) 晴	巻機山(1967m) 清水桜坂から	三〇日(月) 曇	筑波山(877m) つつじが丘から
六日(金)曇	鳥海山(2236m) 鉢立から	一八日(水) 晴	苗場山(2045.3m) 小赤沢から	三一日(火) 晴	仙台にて荷物の自宅発送とレンタカーの精算をすませて空路福岡へ
七日(土)晴	月山(1984m) 姥沢から	一九日(木) 晴	谷川岳(1963m) 土合口から	附記	費用
八日(日)晴	大朝日岳(1870.8m) 朝日鉱泉から	二〇日(金) 曇	武尊山(2158m) 武尊神社から	飛行機代等(大分、福岡、仙台・往復)：七〇,〇〇〇円	レンタカー代(三日間)：一八,〇〇〇円
九日(月)晴	蔵王山(1841m) 蔵王山麓駅から	二一日(土) 小雨	至仏山(2228.1m) 鳩待峠から	ガソリン代(四、三〇〇km走行)：七二,五〇〇円	宿泊代(五泊分・酔ヶ湯温泉、朝日鉱泉、御池、武尊神社、鷹ノ巣)：五五,〇〇〇円
一〇日(火)晴	飯豊山(2105.1m) 川入御沢から	二二日(日) 晴	日光白根山(2577.6m) 丸沼高原から	飲食代：七八,〇〇〇円	雑費：三〇,〇〇〇円
一一日(水)	飯豊山(二日目) 三国岳小屋泊まり	二三日(月) 曇	男体山(2484.5m) 二荒山神社から	合計：四三三,五〇〇円也	
	吾妻山(2035m) 白布温泉から	二四日(火) 晴	皇海山(2148.6m) 皇海橋から		
	一、二日(木) 小雨		赤城山(1827.6m) 黒檜山登山口		
	磐梯山(1818.6m) 猫魔八方台から		二五日(水) 曇		
	安達太良山(1699.6m) 奥岳から		那須岳(1915m) 峠ノ茶屋から		
	一、三日(金) 晴		二六日(木) 小雨		
	会津駒ヶ岳(2132.4m) 駒ヶ岳登山口から		平ガ岳(2141m) 鷹ノ巣から		
	一、四日(土) 小雨		二七日(金) 晴		
	燈ガ岳(2346.0m) 御池から		浅間山(2568m) 峠ノ茶屋から		
	一、五日(日) 雨		二八日(土) 晴		
	越後駒ヶ岳(2002.7m) 枝折峠から		四阿山(2354m) 鳥居峠から		

私の無名山ガイドブック371

飯田勝之

里山の稜線歩き

(その2)

来縄山(376,4m)

豊後高田市街地の南にあるなだらかで小高い山は、国東六郷満山の本山本寺の一つ、大折山報恩寺のある応利山である。来縄山へはこの応利山の山頂付近を通って登ることとなる。

かつてはこの応利山へは、壊れかけた、苔むした石段やカヤヤヤブになかば覆われた細い山道を登り、その途中の道脇には、茂みに身を隠すようにひっそりと、一對の立派な仁王像が立っていた。しかし、近年登山口から山頂の手前まで巨大な石段が築かれて、仁王像も広い明るい階段の脇に移動させられてしまい、草露をかき分けて登った昔日の面影はない。

『文明は限りなく合理主義を追求し、文化は頑固に合理主義を否定し、両者は互いに相容れないものなのだ』とは、ある歴史小説家が言った言葉だ。

近代土木工事は、長い参道に巨大な石段を容易に築き上げてしまったが、そのためにもまた小さな古い文化が形もなく壊し去られてしまっているのだ。

岩木山



(階段と仁王像)



シイ、カシ、タブなどの照葉樹の林の中の緩く下る道を進む。数分で樹林の中の広い暗部に達する。ここから緩い登りとなるが、道は比較的にはつきりしており、格好の散策路といえる。小さなピークを登り越すと、やや西に方角を変えて次第に急な登りとなる。照葉樹の古木の中に広い伐開路が頂上に向かって直登している。あえぐような急登を約二〇分ほどで狭い山頂に登り着く。



それにしても、この石段は、実用的にもすこぶる使い勝手が悪い。見た目の良いが、大きな石の高一段一段は、足の弱いお年寄りなどは、とても難渋しそうな造りである。その点、古くから至る所にある、神社仏閣の石段は、それを登る信心深き一人ひとりのことを、じつに深く考えて造られているものだと改めて思う。

報恩寺を過ぎ、古い広い山道を少し行くと「風神大権現」の前の広場につく。その直下には東側から林道が登ってきている。応利山の山頂は、風神の石の祠の横を通り、奥のほぼ平らな樹林の中、疎林をかき分けて北にたどれば数分で、二等三角点にたどり着く。しかしただ広い山頂は深い木立で展望はない。

来縄山へは風神の広場から南に、

四等三角点のある山頂は樹林の中で展望はないが、深い照葉樹の森が、里近い山とは思われない雰囲気を感じさせている。山頂から稜線伝いに津波土山へ至るルートがあるようだが判然としない。

### 善法寺の稜線 (732.1m)

九六位山城を源とする末広川が臼杵市街地に流れ込む手前に、南からの小さな支流と合流するところが善法寺。その支流沿いの稜線と、その上の小ピークが今回の目標。支流に沿って遡ると、民家の途絶えたところに小さな橋がある。この橋を渡ったところからその



まま前方(東)の山腹にとりつく。カシやツバキの軽いブッシュを分けて崖をよじ登ると、照葉樹の二次林で、林床は下草や低木もなく歩きやすい。かつては薪炭林として、幾度となく伐られたであろう後が伺える、県南地域に普通見られる二次林だ。急斜面をひたすら直登すると、二〇分足らずで稜線に登りつく。

北西から南東に向かって登る緩やかな稜線は、両側は素晴らしい照葉樹の太木が並び、その中にはながら快適な稜線上の登山道か遊歩道である。もちろん、こんなところに登山道などあるはずはなく、古くからの境界をかねた稜線道と思われる。

この稜線上の小ピークはさらに南東に向かって徐々に高度を上げて、水ガ城山(888.8m)へと続くが、その間には至るところ濃密なブッシュが行く手を阻んでいる。

## お知らせ



### 十一月月例山行のご案内

・月 日：十一月二五(日)  
 ・目的地：熊ガ岳(627m)  
 (来浦富士・くのうらふじ・国東市)  
 ・出 発：十一月二五日午前六時サニ一出発  
 ・現地集合：国東市水谷峠七時三十分集合

### 十二月月例山行のご案内

・月 日：十二月八日(土)九日(日)  
 ・目的地：花尾山(はなおきん) (渋木富士・しぶきふじ) 669m (山口県長門市・秋芳町一位ガ岳(いちいがたけ) (長州富士・ちようしゅうふじ))  
 ・時間都合によっては、付近の狩場山や、赤根山などに登ることも予定しています。

### 一月月例山行のご案内

・月 日：一月二十日(日)  
 ・目的地：胡麻柄岳(88.7m)  
 (津久見富士・つくみふじ・津久見市)  
 ・出 発：午前六時サニ一出発  
 ・現地集合：津久見市下青江の国道三叉路付近へ七時集合

### 二月月例山行のご案内

・月 日：二月十七日(日)  
 ・目的地：震岳(ゆるぎだけ)  
 (鹿本富士・かもとふじ) (肥後小富士・ひごこふじ) 416.3  
 (熊本県・山鹿市)、高畑山(たかはたやま) (河原富士・かわはらふじ) 肥後の小富士(ひごのこふじ) 795.6m (熊本県・西原村)  
 ・出 発：二月十七日午前五時サニ一出発(なお、前夜出発に練り上げることも含めて、参加者

(豊田富士・とよたふじ) 672m (山口県長門市・豊田町)  
 ・出 発：八日(土)午前五時サニ一出発  
 一泊二日で山口県西部の『富士』にちなんだ山を登る計画です。

・テント、シュラフ、食糧等の防寒・野営の準備をしておいて下さい。

で相談のうえ、変更することも  
あります)

※ 月例山行の日程等が四月  
の定例総会資料の記載と変わ  
っています。ご注意ください。

## 後記

○ グリーンウオークという山雑  
誌の主幹・中村氏あてに、赤テ  
ープと山頂私標の乱発について  
投稿したところ、すぐに夏号の  
「蝸牛独白」にとりあげられ、  
名解説をえた。

○ すぐに、秋号で反響があり、  
○ 山の会代表、屋部氏の投書  
が以下です。

○ Aさんのお考えは登山を楽し  
む方の基本ではないでしょうか。  
○ しるしをしないとヤブこぎで  
きないひ方はしないことです。  
初心者がそれに誘われて事故が  
心配です。

○ 目印を沢山付けた新しい道を  
造っている方々がどこの山にも  
います。(行政が町おこしを名  
目に荷担)  
○ 道標には個人名の宣伝は不要  
です。登山道の目印は、ビニ  
ルテープはやめましょう。  
(安部)

○ GARMINのGPSmap

○ CCSxは樹林地帯や谷沿いで  
もかなり正確に受信できる。故  
障などを考えなければ、道に迷  
う事はありませんぐらいだ。

○ 最近の登山は、ガイドブック  
を片手に立派な登山道を歩き、  
山頂付近まで林道や公道が来て  
いるのだ。然しながら、四・五  
十年ぐらい前の登山者たちは、  
五分分の一の地図を片手に直感  
と、閃きだけで登っていたと思  
えると、素晴らしいことだと思  
う。月例山行で行った由布山の  
東ルートの急斜面はよくぞこの  
ルートを開拓したものだと感じ  
する。

(中野)

○ 異常に熱かった夏。いつまで  
も残暑の残った秋。日本列島が  
すっぽり亜熱帯に移動したよう  
な今年。山の動植物たちもきつ  
と戸惑っていることでしょう。

○ 今年も山の紅葉はかなり遅れ  
て色づきそうな気配。何処かく  
すんだような去年の紅葉が思い  
出されて、今年の色づきを心配  
しています。

○ 中部地方や日本海側の山を中  
心にミズナラが枯れるナラガレ  
現象が起き、ドングリを餌とす  
るツキノワグマの生態にも影響  
が心配されているようです。

○ 紀伊半島以南の海岸沿いでは  
シイ、カシ類の集中的枯死が目  
立つようになってきているとのこと  
大分の近くではまだあまり目  
つきませんが?

○ これらはカシノナガキクイム  
シという甲虫の運ぶ菌が原因で  
あるのは分かっているが、異例  
の繁殖の原因には温暖化が影響  
との説も?

(K・I)

## ニニは何処?



この写真は何処から何処  
を撮ったものでしょう?

○ お分かりの方は事務局まで  
はがきでお知らせ下さい。当た  
った方には記念品をさし上げま  
す。(二名までで、正解多数の  
場合は抽選します。)  
・ 締め切り 一二月三十一日  
・ 前回の正解は大崩山荘上流の  
登山道から見た小積ダキでした。

## 日本山岳会東九州支部報 第39号

2007年(平成19年)10月25日(木)

発行者 梅木秀徳

編集者 飯田勝之

発行所 〒870-0021

大分市府内町1-3-16

サニースポーツ内 西 孝子方

TEL・FAX 097-532-0926

題字 (故)佐藤正八